

Edited by Jean-Marie Robine, Eileen M. Crimmins, Shiro Horiuchi and Zeng Yi

*Human Longevity, Individual Life Duration,  
and the Growth of the Oldest-Old Population*

Springer, 2006, xvi, 444p. (International Studies in Population, Vol.4)

2002年に没したKannistoへの追悼に始まる本書は、人類の長寿、そして長寿と健康の関係に関する知見の最先端を示す18の論文から構成されている。全体は5部に分けられ、第1部は「理論的及び比較論的な生物学的概念」として、最初にRobineが、人口学、疫学、生物人口学、生物学というカテゴリー毎に、人類の寿命に関する現在の知見や研究課題を幅広くレビューするとともに、今後解決されるべき問題を述べている。この参考文献は包括的な文献リストとしても価値が高い。Austadは人類にも見られる寿命の格差の特性を哺乳類に一般化して考察し、長寿化が死亡分布の集中化を引き起こすとの証拠はないと論じている。CareyとJudgeは寿命伸長に関する一般理論を、自己増強のかつ積極的選択の歴史と見る観点から展開している。

第2部は「老化と超高齢者に関する経験的・解析的研究」であり、YiとVaupelが中国の超高齢死亡を分析し、2パラメータロジスティックモデルのあてはまりのよさを示している。KannistoはC-Family（ある死亡発生割合に対応する最小区間）という新たな死亡集中度指標を用いて分析を行っている。Nusselderは、近年のオランダに見られる、高齢層での平均余命伸長鈍化や死亡の集中化に関する要因を分析し、Poulainらはサルデーニャにおける例外的な男性の長寿の評価、BourbeauとDesjardinsはケベックにおける超高齢層の死亡率とそのデータ品質を評価している。

第3部は「死因と生物学的脆弱性」であり、Mesléが超高齢者の死因について、データ品質、複数コーディングされた死因データの活用、20世紀の死因パターン特定という観点から分析を行っている。Horiuchiは死因の年齢パターンについて、老年層と中年層の違いから分析している。ChristensenとHerskindは生存年数及び脆弱性のばらつきがどの程度遺伝学的要因で説明されるかについて、また、EwbankはAPOE遺伝子型と死亡率の関係について論じている。

第4部は「死亡の性差・社会的な決定要因と帰結」であり、JylhäとLuukkaalaは縦断調査を用いて超高齢者における死亡率の社会的決定要因を分析し、WilmothとDennisは米国における高齢者死亡率の社会的格差に関し、研究課題、データ、方法論及びその結果の観点から、広範なレビューを行っている。Vallinは、超高齢層における死亡の性差を論じている。

第5部は「死亡と障害の動向の要因」とされ、Jeuneが高齢者の心血管疾患による死亡率低下の説明要因について分析し、Caselli、Vaupel及びYashinが超高齢層の死亡率低下について、脆弱性を考慮したモデルを用いて人口学的視点から論じている。最後に、イギリスの超高齢者の結婚状態と家族支援について、GrundyとMurphyが論じている。

本書では、長寿や健康に対して、特に超高齢層に焦点を当てた研究論文が集められているが、分析の視点は人口学にとどまることなく疫学・生物学・医学など広範な領域に渡っており、この問題に対して極めて幅広いアプローチが存在するとともに多彩な研究成果があることに圧倒される。しかしながら同時に、本書でも随所で述べられている通り、超高齢層の死亡率について未だ解明されていない問題が多く存在しているのもまた事実である。わが国の高齢化は他の先進諸国に比較して極めて急速に進行していることから、超高齢層の死亡データの蓄積も増加しつつあり、これに対する諸外国の関心も高まってきている。本書に見られるような多角的・学際的アプローチをより一層強化するとともに、豊富となった死亡データを活用して、超高齢層の死亡動向の解明をリードできるよう研究の活性化を図っていくことが、国際的にもトップクラスの長寿国であるわが国の死亡研究に期待されていることではないだろうか。

(石井 太)